View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要　第11号、2020年、81～90頁。　考古学研究室紀要

# 佐田谷・佐田峠墳墓群の企画展「庄原盆地 弥生王墓誕生」をおえて

野島　永・稲村秀介・村田　晋

## １．はじめに

広島大学考古学研究室では帝釈峡遺跡群の調査研究の一環として、東城町（現庄原市）東山岩陰遺跡の発掘調査をおこない、縄文時代における小規模な居住地（キャンプサイト）の性格を探ってきた。東山岩陰遺跡の発掘調査終了と東城町の庄原市への合併時期が重なり、その後の発掘調査地については広域合併した庄原市の意向により、旧庄原市内での調査対象地も模索されることとなった。このため、庄原市・庄原市教育委員会の要請により、弥生時代後期前葉に造営された佐田谷墳墓群の周辺において確認されていた佐田峠墳墓群の実態解明と、両墳墓群の史跡指定を目的とした調査研究を開始することとなった[(1)]。その結果、広島大学と庄原市の間において佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査に関わる共同研究事業（2008（平成20）～2014（平成26）年度）をおこない、2016年から2018年にかけて、順次調査研究成果を報告した（野島編 2016、今西・辻村編 2017、野島・村田編 2018）。

この結果、各墳墓の発掘調査から墳墓群の個別様相がある程度あきらかになった。それだけでなく、両墳墓群には墳墓の構築と埋葬の手順に大きな変化があり、佐田谷１号墓や３号墓がその後の墳墓（墳丘墓）の大型化に関わる出発点となっていたことをあらためて確認することができた。なかでもとくに後期前葉に属する佐田谷１・３号墓出土土器の特殊性が注

第１図　企画展展示 第３章「弥生王墓誕生への道のり」

第２図　佐田谷３号墓出土脚台付鉢形土器（脚付鉢）

目されるところとなった。注口のある脚台付鉢形土器（脚付鉢と略称する）が塩町式土器に通有な鉢形を呈するもの（真木Ｂ類（真木 2017、野島・村田編 2018））から、壺形（真木Ｄ類）（第２図）に変化し、吉備南部地域と共通した加飾意匠を採用しつつ、より大型化していく過程をみてとることができた（第３図左）。墓壙上の葬送儀礼にのみ利用され、祭祀専用土器として製作され始めたこともあきらかとなった。

さらに、佐田谷墳墓群では大型墓壙をもつ中心埋葬の出現、墓壙上面での柱穴の検出、円礫の散布、さらには木棺を覆う木槨構造などといった墳丘墓上の新たな変革がみられた。後期後葉以降、出雲・伯耆地域周辺や吉備地域、丹後地域などにおいて巨大化する弥生墳丘墓にみられる諸要素の遡源とみなすことができる。佐田谷・佐田峠墳墓群は先駆的な舞台装置を作り出し、入念な葬送儀礼を創出した経緯を物語るのである。

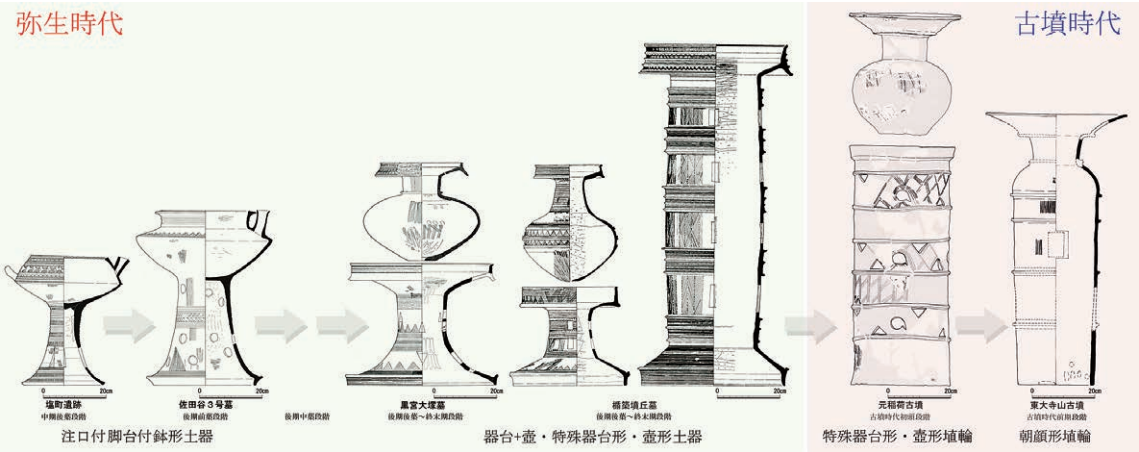
三次・庄原地域の注口のある脚付鉢はのちに吉備地方の弥生墳丘墓に盛行する特殊器台・特殊壺に先行する丹塗りの大型供献土器と評価することもできよう（第３図）。これらのことから帝釈峡博物展示施設時悠館学芸員の稲村秀介の発案により、広島県内４ヵ所に分散して収蔵・保管されていた佐田谷・佐田峠墳墓群から出土した土器群を一堂に会して展示することとなった（第１図）。　（野島）

## ２. 展示企画「庄原盆地 弥生王墓誕生」の概要

庄原市教育委員会と広島大学大学院文学研究科考古学研究室が主催した、庄原市帝釈峡博物展示施設時悠館の秋・冬の企画展「庄原盆地 弥生王墓誕生」の概要を述べる。

### （１）開催の背景

庄原市には現在、博物館・資料館４館が設置されており、「第２期庄原市博物館・資料館の新たな在り方基本計画」（2016（平成28）年度策定）に基づき、全館共通コンセプトである「全国に誇れる市民の博物館・資料館」の具現化に向けた取り組みを各館において進めてきた。当館においても、2018年度に館の運営方針を策定公表し、来館者に“驚き・発見・感動”を与える展示と講演会を通じて上記コンセプトの早期実現をめざす方向とした。今年度は、全国的に見ても高い価値が潜在する当市の歴史文化資源をテーマとし、下半期には秋・冬の企画展「庄原盆地　弥生王墓誕生」を開催する計画とし、準備を進めた。




第３図　脚台付鉢形土器から円筒埴輪へ（展示パネル）

## （２）開催の経過

当該企画展は、佐田谷・佐田峠墳墓群の史跡指定化の機運醸成に向けた市教委の速報展を兼ねて開催し、調査研究の中核を担った広島大学大学院文学研究科考古学研究室に主催者に加わって頂くなど全面的な協力を賜った。また、市民等の多様な主体の参画も募ったところ、次のとおり多くの関係機関が連携して開催することとなった。

主　催：庄原市教育委員会、広島大学大学院文学研究科考古学研究室
共　催：庄原商工会議所
主　管：庄原市帝釈峡博物展示施設時悠館
後　援：広島県教育委員会・庄原ライオンズクラブ・庄原市観光協会・帝釈峡観光協会・庄原自治振興区・高自治振興区・帝釈自治振興区・庄原市自治振興区連合会・庄原郷土史研究会・東城ふるさと今昔講座・帝釈文化研究会

なお、開催期間は2019（令和元）年10月５日（土）から2020（令和２）年２月２日（日）である。期間中、関連行事として記念講演会１回、講座２回、展示解説会５回を実施した。このうち11月９日（土）に実施した記念講演会「“最初の王墓”が意味するもの」（講師：野島永（広島大学文学研究科））は95名の参加者があり、きわめて盛会であった。また、１月25日（土）に実施した講座②「佐田谷・佐田峠墳墓群と備後北部をめぐる交流」（講師：村田晋（広島県立歴史民俗資料館））も46名の参加者があった。

期間中の入館者数は合計835名（うち関連行事参加者185名）であり、前年同時期比115%となった。来館者へのアンケート結果（回答80件）を集計したところ、「この展示をみるため来館した」31.3%、「今回企画展は驚き・発見・感動があった」80.1%（大変にあった41.3%、あった38.8%）など、今回の企画展の開催効果は相当にあったと客観的に評価できよう。（稲村）

## （３）展示内容

展示構成は、企画展示室の壁面に沿って４つのテーマを設定した。内容は主として『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書研究編』（広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原

市教育委員会、2018年）における新知見に基づき、野島の監修のもと、稲村が企画編集した。遺物展示に際しては広島県立歴史民俗資料館学芸員の村田晋の助言を得た。

**第１章「佐田谷・佐田峠墳墓群の調査」** 1980（昭和55）年から約40年間に及ぶ調査研究の歩みを概観し、合計８基の墳墓の調査概要と写真を、築造順に展示した。

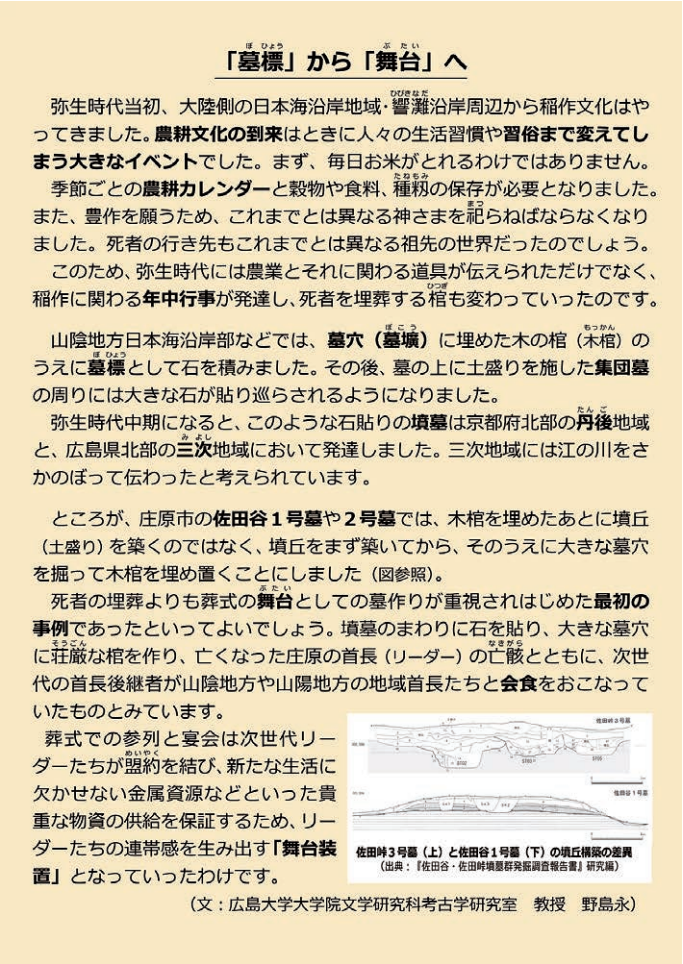
**第２章「地域文化圏の形成と弥生墳丘墓」** 市内弥生遺跡、塩町式土器文化圏の形成、市内の弥生墳丘墓について概要を紹介し、当館が立地する庄原市東城町の戸宇大仙山遺跡、戸宇牛川遺跡、新発見の庄原市西城町熊野神社境内遺跡の土器を展示し、中国山地を往来する弥生人の交通網が、墳丘墓の発達の原動力になった可能性を示唆する展示とした。

**第３章「弥生王墓誕生への道のり」** 佐田谷・佐田峠墳墓群の出土遺物のオンパレードとし、供献土器の変化から王墓誕生のプロセスに迫っていく内容をめざした。また、供献位置が墳丘外から、墳丘上、さらには墓穴上から中心埋葬上へと移動変遷した様子もわかるように工夫した。

**第４章「庄原盆地の弥生王墓が語ること」**「墓標」から「舞台」へという墳丘墓の機能の変革に見いだせる我が国の墓制史上の意義と、当該変革が庄原盆地で生じた理由を解き明かす内容をめざし、パネル原稿を野島が作成した（第４図）。また、市教委における史跡指定への取り組みを紹介するパネルも展示した。

上記の各章を通じて展示した遺物の総数は115点である。また、室内の一角へ塩町式土器のレプリカを置き、土器パズル（戸宇牛川遺跡の器台）体験コーナーも設けた。さらに中央の床面には、「最初の王墓」の墓穴の巨大さを体感できるよう、木槨墓とみられる佐田谷３号墓の中心主体部（最大径5.8m）を1/1スケールで表現した（第１図展示会場床面）。

約40年間に及ぶ佐田谷・佐田峠墳墓群の調査を通じて得られた出土遺物は、広島県教育委員会（広島県埋蔵文化財調査センター・広島県立歴史民俗資料館）、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、庄原市教育委員会の３者４機関に分散して所蔵されてきた。今



**「墓標」から「舞台」へ**

弥生時代当初、大陸側の日本海沿岸地域・響灘沿岸周辺から稲作文化はやってきました。**農耕文化の到来**はときに人々の生活習慣や**習俗まで変えてしまう大きなイベント**でした。まず、毎日お米がとれるわけではありません。

季節ごとの**農耕カレンダー**と穀物や食料、種籾の保存が必要となりました。また、豊作を願うため、これまでとは異なる神さまを祀らねばならなくなりました。死者の行き先もこれまでとは異なる祖先の世界だったのでしょう。

このため、弥生時代には農業とそれに関わる道具が伝えられただけでなく、稲作に関わる**年中行事**が発達し、死者を埋葬する棺も変わっていったのです。

山陰地方日本海沿岸部などでは、**墓穴（墓壙）**に埋めた木の棺（木棺）のうえに**墓標**として石を積みました。その後、墓の上に土盛りを施した**集団墓**の周りには大きな石が貼り巡らされるようになりました。

弥生時代中期になると、このような石貼りの**墳墓**は京都府北部の**丹後**地域と、広島県北部の**三次**地域において発達しました。三次地域には江の川をさかのぼって伝わったと考えられています。

ところが、庄原市の**佐田谷１号墓**や**２号墓**では、木棺を埋めたあとに墳丘（土盛り）を築くのではなく、墳丘をまず築いてから、そのうえに大きな墓穴を掘って木棺を埋め置くことにしました（図参照）。

死者の埋葬よりも葬式の**舞台**としての墓作りが重視されはじめた**最初の事例**であったといってよいでしょう。墳墓のまわりに石を貼り、大きな墓穴に荘厳な棺を作り、亡くなった庄原の首長（リーダー）の亡骸とともに、次世代の首長後継者が山陰地方や山陽地方の地域首長たちと**会食**をおこなっていたものとみています。

葬式での参列と宴会は次世代リーダーたちが盟約を結び、新たな生活に欠かせない金属資源などといった貴重な物資の供給を保証するため、リーダーたちの連帯感を生み出す**「舞台装置」**となっていったわけです。



**佐田峠３号墓（上）と佐田谷１号墓（下）の墳丘構築の差異**
（出典：『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』研究編）

（文：広島大学大学院文学研究科考古学研究室　教授　野島永）

第４図　パネル「「墓標」から「舞台」へ」

回の企画展の学術上の意義は、これらの出土遺物が初めて一堂に会した点にある。出土遺物のほとんどを総覧できる展示としたことにより、塩町式土器等の庄原盆地の在地土器と、吉備や伯耆など周辺諸地域との関わりを示す多彩な土器の実例を直接比較して観察できる等、研究者に対しても貴重な機会を提供できたといえる。後述するように、今回の展示を通じて既報告の資料の一部で器種認定の見直しが進んだことも大きな成果であった。

また、一般見学者に対しても、これまで周知が十分には進んでいなかった庄原市の弥生墳丘墓について、新たに判明した考古学上の知見を具体的な出土遺物の全体像を例示しながら紹介することができた点は、非常に重要であったといえる。（稲村・野島）

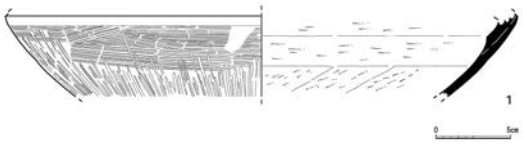
## ３．調査成果－新知見を得た資料の紹介－

本展における展示品は佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器が中心となったが、そのうち実見により器種の認識を改めた資料、未報告であった熊野神社境内採集の資料を紹介する。

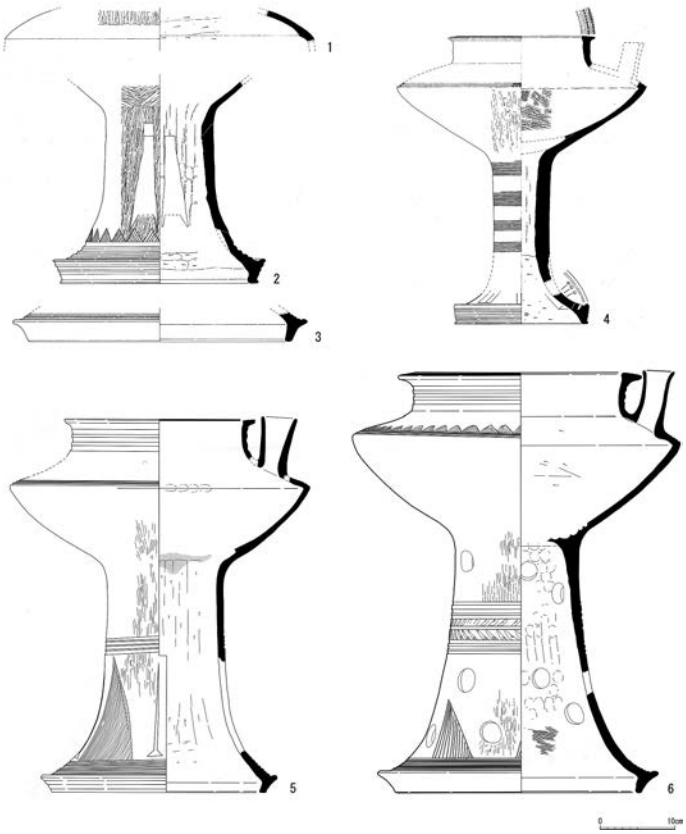
### （１）佐田谷１号墓出土土器の器種修正

第５図は脚付鉢の鉢部下半である（図版第１）。佐田谷１号墓西側周溝から出土した。本資料は壺の胴部上半として報告されていたが（第６図１、妹尾編 1987（第10図４、15・16頁））、現状においては、同じ形態の大型壺は弥生時代後期前葉の周辺地域において類例がなく、特異な土器として注目された。今回の展示に関わり資料を実見したところ、内外面の調整や文様が施された位置からみて、脚付鉢の鉢部下半の可能性が高いと判断したため、ここで再報告しておきたい[(2)]。

外面は屈曲部以下を横ハケ後、放射ミガキによって調整され（図版第１中段左）、屈曲部付近にはさらに横ナデ調整が施されている。屈曲部の直上には沈線文が観察できる（図版第１中段右）。調整・施文の後、全体に赤色顔料が



第５図　佐田谷１号墓　脚付鉢（1/5）



第６図　佐田谷１・３号墓　脚付鉢関連資料（1/10）

塗布されている。内面は下位に斜め方向のヘラケズリが施された後、上位はさらに横方向のヘラケズリによって調整されている（図版第１下段左）。断面の屈曲部付近には粘土接合痕が観察できる（図版第１下段右）。焼成は良好で、内外ともにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。胎土は密で径2.0㎜以下の角閃石を多量に含んでいる。同じ西側周溝から出土している器台（第６図２・３）とは長石を全く含まない点で胎土が異なるため、別個体である。なお、径の図上復元にあたっては、６分の１周弱程度残存する大型破片であり、真弧とコンパスを用いた通常の方法では復元値が安定しなかったため、実物比較によって近い法量が想定できる西側周溝出土の器台（第６図２）を参考に用いた。鉢部復元最大径は33.8㎝となる。

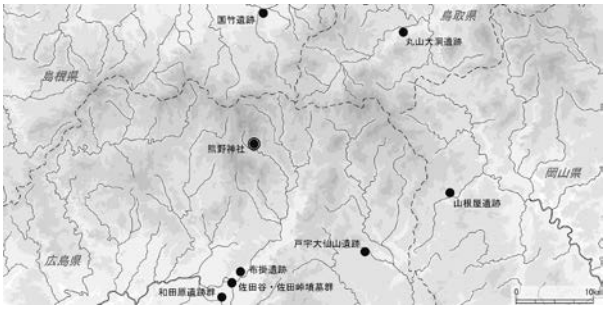
**（２）熊野神社境内採集の資料**

第８図は本展においても展示した土器片である。後述のように弥生時代中期の遺物と考えられ、あわせて採集地点が新規発見の弥生時代遺跡とみられることから、当時の中国山地における具体的な山越え交通ルートの復元にとっても重要になる可能性があるため、ここに報告しておく。（村田）

**採集状況**　熊野神社（庄原市西城町熊野所在、第７図）本殿から南東に続く参道脇にある宮田武義顕功碑の西側斜面流路からの採集品である（図版第２下段）[(3)]。発見時の状況から、後世の土地改変等によって原位置から離れた土器片が谷部へ流れ込み、再堆積したことが想定できる。割れ口があまり摩滅していないことから、比較的近くからの流れ込みと考えられる。同地点ではこれまで遺跡は確認されていなかったが、現在の熊野神社境内及び周辺の緩斜面に、弥生時代遺跡（仮称:熊野神社境内遺跡）が広がっている可能性がある。（稲村）

**観察所見と時期**　第８図は甕の肩部片である。外面は風化が著しいが、無文で、一部に縦ハケ調整と考えられる平行条痕が観察できる。頸部には強い横ナデが施されている（図版第２中段左）。内面は斜め方向のハケの後、肩部より下位を中心にミガキ、頸部をナデによって調整されている（図版第２中段右）。焼成は良好で全体に硬く焼けているが、外面は特に焼成状況が良い。外面は橙色（7.5YR7/6）、内面と断面は灰色（5Y5/1）を呈する。胎土は緻密で径0.5㎜程の石英・角閃石を含んでいる。

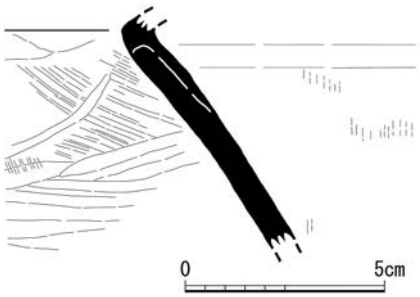
周辺地域において、弥生時代の後期以降、古墳時代の土師器も含めて、甕の頸部以下にはヘラケズリがみられることが通有であるため（正岡・松本編 1992、村田 2018、岩本編 2018ほか）、本資料の所属時期が弥生時代中期以前であることがわかる。そして、弥生時代中期中葉でも古相の甕は口縁部径と胴部最大径に大きな差はないが、中期中葉でも新相から中期後葉にかけて、甕の胴部が張り出し、肩部は内傾していく傾向がある（第９図）（正岡・松本編 1992、河合2015）。本資料は肩部の角度からみて中期中葉新相以降の特徴をもつといえる。以上により、本資料の所属時期は弥




**第７図　県境周辺の山間地遺跡**（1:500,000）

生時代中期中葉新相から中期後葉頃と考えておきたい。

（村田）

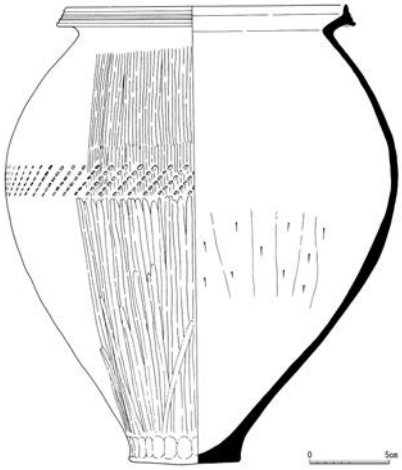



**第８図　熊野神社周辺採集の弥生土器**（1/2）

## ４．おわりに

最後に、企画展「庄原盆地 弥生王墓誕生」に遠路はるばるお越しいただいた皆様方に御礼申し上げたい。また、共催いただいた庄原商工会議所、後援に加わっていただいた広島県教育委員会、庄原ライオンズクラブ、庄原市観光協会をはじめ、多くの機関からご協力を得た。発掘調査中にも高自治振興区をはじめ、地元の皆様にご支援をいただいた。この場を借りて感謝したい。

これまでの調査研究において一定の成果を得ることができたが、今後は佐田谷・佐田峠墳墓群の保存整備事業が軌道にのることを期待したい。なお、第１・４節は野島、第２節は稲村と野島、第３節は稲村と村田が執筆し、野島が文体を調整して成稿した。



**第９図　熊野神社周辺採集の弥生土器類似資料**（1/5）

**註**

(1) 広島大学考古学研究室では、これまで帝釈峡遺跡群の発掘調査に関して、遺跡群の所在した東城町とは密接な連携を保ってきた。このため、東城町が庄原市に併合した際に当時の考古学研究室教授古瀬清秀氏と、庄原市教育委員会生涯学習課文化振興係長（旧東城町教育委員会生涯学習課）佐古辰巳氏による協議があった。

(2) 本資料が壺ではなく脚付鉢の破片である可能性を初めに想定したのは展示担当者の稲村である。稲村から情報提供を受けて村田が資料を実見し、脚付鉢の鉢部下半と判断した。

(3) 稲村が2019（平成31）年４月27日に現地踏査を行った際に採集した。土器片は流水の浸食を受けて露出しており、放置すれば流失すると考えたため、その場で取り上げた。

**挿図出典**

第１・２図：稲村撮影。第３図：今西・辻村編2017、梅本編2015、間壁・間壁・藤田1977、金関編2010、近藤編1992、真木2017より野島作成（一部改変）。第４図：野島作成。第５・７・８図：村田作成。第６図：１～４：妹尾編1987（一部改変）、５・６：今西・辻村編2017。第９図：藤田編1988（一部改変）。

**図版出典**

図版第１：広島県立埋蔵文化財センター蔵、村田撮影。図版第２：庄原市帝釈峡博物展示施設時悠館蔵、村田撮影。下段、採集地点近景・発見状況：稲村撮影。

**引用・参考文献**

今西隆行・辻村哲農編　2017 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』調査編（2）、庄原市教育委員会発掘調査報告書29、庄原市教育委員会。

岩本　崇編　2018 『前期古墳編年を再考する』六一書房。

梅本康広編　2015 『元稲荷古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第２冊、向日市埋蔵文化財センター。

金関　恕編　2010 『東大寺山古墳の研究　初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究』科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書〈BA31388455〉平成19～21年度、東大寺山古墳研究会。

河合　忍　2015 「中国・四国」『弥生土器』考古調査ハンドブック12、ニューサイエンス社、160～208頁。

近藤義郎編　1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会。

近藤義郎・春成秀爾　1967 「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号、13～35頁。

妹尾周三編　1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター。

野島　永編　2016 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』調査編（1）広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第３冊・庄原市教育委員会発掘調査報告書28、広島大学考古学研究室。

野島　永・村田　晋編　2018 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』研究編　広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第４冊・庄原市教育委員会発掘調査報告書30、広島大学考古学研究室。

藤田広幸編　1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。

間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司　1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号、1～55頁。

真木大空　2017 「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科古学研究室紀要』第９号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～24頁。

正岡睦夫・松本岩雄編　1992 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社。

村田　晋　2018 「佐田谷・佐田峠墳墓群出土土器と墳墓の変遷」『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』研究編、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原市教育委員会、3～10頁。

図版第１

佐田谷１号墓西側周溝出土脚付鉢

図版第２

熊野神社周辺採集土器